

# 欺瞞か妥協か——壬辰倭乱期の外交交渉

鄭潔西（寧波大学）

## 発表要旨

---

壬辰倭乱は万曆二十年（1592）四月日本軍の釜山上陸から、万曆二十六年（1598）十一月日本軍が明、朝両国の共同攻撃を受けて全面的に撤退、帰国するまで、七年間に及んだ。しかし、実際の戦争状態は併せて二年間に過ぎないゆえに、四年以上続いたのは和平交渉の期間（1593－1597）であった。この期間中に、明（朝鮮を含め）と日本は一度外交手段を用いて朝鮮半島の軍事衝突を調停し、東アジアの平和を再構築しようとしたが、結局失敗した。

戦時中の外交交渉に関して、お互いの平和条件が大きく離れて、妥協の可能性が見えないにもかかわらず、双方の外交担当者が共謀・欺瞞の手段を以って各国の支配者に虚偽の報告をし、その「合作」によって、結局冊封が失敗に終わり、戦争が再び起きた、という見方がいままで一般的であった。

もちろん、外交活動では双方の外交担当者が主体となって、その交渉過程で現れる情報を幾重にも選別し、両国の高級官僚に全部伝達するわけではないため、欺瞞の疑いは確かにある程度存在する。しかし、実際の交渉過程では、明にしても日本にしても、互いに妥協する側面も存在した。明側は日本軍の朝鮮撤退を要求するほかに、日本との「封貢」を再開するかどうかについても議論を続けていたが、最終決議に「封はするが貢はない」と規定し、もともと許諾した「貢」を撤回した。対日条件は一見厳しくなったが、交渉する余地も残していた。一方、日本側は外交交渉過程で明と朝鮮に妥協し続けたが、朝鮮に対する特殊な優位をあくまでも主張し続け、その外交活動は一見東アジアの「封貢」システムに回帰するように見えるが、実質的には日本の国際的地位を向上させた。

## 略歴

---

〈鄭 潔西 / Zheng Jiexi〉

2004年（中国）寧波大学歴史学部卒。2006年（中国）浙江大学歴史学修士。2011年（日本）関西大学文学研究科博士後期課程修了。博士（文化交渉学）。現職：寧波大学人文メディア学院副教授。

研究分野：対外関係史、壬辰倭乱史。

著作：『国境を越える人、情報ネットワーク、封貢危機：万曆朝鮮戦争と十六世紀末の東亜』（上海交通大学出版社、2017年）、『歴代正史日本伝考注 明代卷』（共著、上海交通大学出版社、2016年）。